

## 第17講 【 病因論Ⅱ 】 教科書 P.59～62

### 『 六淫 ① 』

#### 1. 風邪

[季節性] 四季を通じて見られるが、春に最も多い。

[属性] 陽に属し(陽邪)、木行に属す。

[特徴]

① (陽邪なので)陽位を犯しやすい。

\* 陽位：[体表部・頭顔部・背部・胸腔・肺] 等  
└ [肺・衛気] → : 悪寒・発熱、鼻づまり、咳嗽・ . . .

② 遊走性：動きやすく変化しやすい。

\* 病変部位が一定せず変化しやすい。  
\* 病程(経過)が速く変化しやすい。

③ その他の邪気の担体となる。

: 風邪は六淫の筆頭で、担体(キャリアー)として他の外邪を載せ一緒に人体を犯す事が多い。 例：風寒邪、風寒湿邪  
そのため「風は百病の長」と呼ばれる。

④ 自然界以外の風邪

: 空調設備の風、扇風機の風を受けたまま眠る、乗り物の窓からの風 等

#### 2. 寒邪

[季節性] 四季を通じて見られるが、冬に最も多い。

季節とは関係なく雨に濡れたり、汗をかいて風に当たる・冷たい  
飲み物を沢山取りすぎても寒邪を受けることになる。

[属性] 陰に属し(陰邪)、水行に属す。

[特徴]

① (陰邪なので)陽気を損傷(消耗)しやすい。

→ (陽虚・虚寒)：悪寒・冷え 等

② 凝滞性・痛

：寒には気血津液等を凝滞させ、痛みを引き起こす特徴がある。

(実証タイプ) 痛みの発生機序

「不通則痛、痛則不通」(「痛則不通、不痛則通」)

\* 気血の流れが滞ると痛みが発生する。

③ 収引性

：寒には収引させる力があり、気機を収斂し、組織を収縮させる特徴がある。

例 { 陽気が収斂 → 寒気、丸まって寝る  
衛気が収斂 → 皮膚が収縮し腠理が閉じる  
脈気が収斂 → 血脈が攣縮し、気滞・瘀血が発生する

④ 直接臓腑を犯すことがある。

例：冷たい食べ物を一度に多量摂取する。

寒邪 → 脾胃を直接犯す：腹の冷え、痛み、嘔吐、下痢 等

⑤ 自然界以外の寒邪

：夏季の冷房の効きすぎ 等

### 3. 暑邪

[季節性] 明らかな季節性があり、夏(立夏～夏至、日本では夏の一番暑い時期)に存在する。 \* 夏以外には存在しない。

[属性] 陽に属し(陽邪)、火行に属す。

[特徴]

① 炎熱の特性を持つ

: 暑邪によって引き起こされる病証を(実)熱証と呼ぶ。

暑邪 → 人体 (実熱証) : 高熱、多汗、顔面紅潮、目赤 等

② 炎上性・開泄性・傷陰性

\* 炎上性 : 上へ向かう特性

頭顔部を犯しやすい ⇒ 眩暈、顔面紅潮、目赤 等

\* 開泄性 : 腠理を開いて大汗を出す → 津液外泄 → 

→	津液不足
→	気 虚

※ 暑邪の炎上性・開泄性を表わすのに「昇散」という言葉が使われる。

\* 傷陰性 : 津液を消耗しやすい。 ⇒ 口渇、皮膚・粘膜の乾き 等

③ 挾湿性

: 暑邪は湿邪を伴いやすい。

※ 夏は暑いうえに非常に湿度が高く湿邪も多い。そのため、暑邪は湿邪を伴う事が多い。

夏 

暑邪	}	湿熱 → 人体 (湿熱証) : 身熱不揚、体が重く疲れる、吐き気 等
湿邪		

## 4. 湿邪

[季節性] 長夏 (夏から秋にかけての季節・夏の終わりの一ヶ月) に

最も多い。

[属性] 陰に属し(陰邪)、土行に属す。

[特徴]

① 重濁性

: 水の邪気なので重く、陽気を損傷しやすいので「重だるさ」が現れる。

例—頭が重い、四肢が重だるい、身体が重だるい 等

② 下注性

: 水の邪気なので下へ下へ向かう性質がある。

人体下部を犯しやすい。 ⇒ 下肢の浮腫、帯下、下痢 等

③ 粘滯性

: 湿邪は動きが遅く停滞する性質がある。

⇒ 湿証は治癒しにくく病程が長い。また治っても再発しやすい。

④ 脾を犯しやすい。

\* 脾は乾燥を好み、湿潤を嫌う性質がある。

\* 湿邪は土行に属し、脾に影響を与えやすい。

} 脾の機能低下

⑤ 自然界以外の湿邪

: 通気性の悪い衣類の着用 → 特に 化学繊維の下着、パンスト 等の着用 等

## 5. 燥邪

[季節性] 四季を通じて見られるが、秋に最も多い。

[属性] 陽に属し(陽邪)、金行に属す。

[特徴]

① 乾燥性

: 津液を消耗しやすい。

津液損傷 ⇒ 滋潤の作用が低下: 皮膚・粘膜の乾燥、フケの増加、目の乾燥、口渇 等

② 肺を犯しやすい。

\* 肺は乾燥を嫌う性質がある。

\* 燥邪は金行に属し、肺を傷めやすい。

} 肺: 乾咳、質の濃い痰、血痰 等